平和 歌に込め25年

戦争を生き延びた動物園のゾウに、子どもたちが列車に乗って会いに行く様子を描いた合唱組曲「ぞうれっしゃがやってきた」。平和への祈りを込めたこの曲を、25年間歌い続けてきた「川口ぞうれっしゃ合唱団」が来年6月のコンサートに向け、8日から練習を始める。「戦争は嫌だ」というたった一つのメッセージを届けるため、大人も子どもも声を合わせる。（大村歩）

組曲「ぞうれっしゃがやってきた」

上 昨年6月、さいたま市の埼玉会館で開かれた第12回コンサート

下 練習日程や運営について話し合う荒木さんら＝川口市で

来年6月にコンサート 川口の合唱団が練習

「ぞうれっしゃがやってきた」は、一九七六年に名古屋市の元小学校教諭小出隆司さんが出版した同名の絵本をもとに、愛知県で八六年に作られた。

あらすじは実話に基づいている。

太平洋戦争当時、敗色濃厚となった日本各地の動物園では、空襲時に猛獣が逃げ出す恐れがあるとして、動物が次々と殺処分された。名古屋市の東山動物園にいた四頭のゾウもその対象になったが、当時の園長らが殺処分を迫る軍部からゾウを守り、マカニーとエルドの二頭が生き残った。

終戦後、子どもたちに希望を与えようと、ゾウに会いに行く特別列車が仕立てられ、東京、埼玉、千葉、三重、福井、大阪の六都府県から、子どもたちを東山動物園に運んだ。街は焼け野原となり、娯楽のない時代に「ぞうれっしゃ」は子どもたちの夢を乗せ走った―。

「川口ぞうれっしゃ合唱団」の会長荒木紀理子さん（六〇）と世話人の栗山明子さん（六四）は、九〇年にこの曲と出会い、「ぜひ川口のみんなと歌いたい」と決意。翌年四月に六百人が集まって歌った。一回限りのつもりだったが、「もっとみんなで歌いたい」との声が多く、二年後にまた集まって歌った。

以後、二年に一度のペースで十二回コンサートを開き、これまでに二歳から八十代までの延べ五千人が参加してきた。一回目から参加している寺西敦子さん（五七）は「この合唱は一度やってみたら、感動で病みつきになる」と笑顔で話す。

合唱団は、練習に来られる人なら誰でも参加できる。「学校に行きづらくなっている子や障害のある子も、ここには来たいと来ている」（荒木さん）。卒団生が「もう一度歌いたい」と子連れで参加するケースも増えているという。

「一回目のときは湾岸戦争があった年。そして今年は安全保障関連法が成立した年。何か運命的なものを感じる」と荒木さん。戦争の影が忍び寄る昨今だからこそもう一度、曲に込められたメッセージをみんなで共有したいと願う。

「川口ぞうれっしゃ合唱団」のコンサート「いのちと平和と子どもたち」は、来年六月十九日、JR川口駅前の川口リリア・メインホールで開く。団員を募集中で、当日まで月二回程度、川口市立教育研究所などで練習を行う。問い合わせは荒木さん（夜間のみ）＝電048（268）9256＝か、電子メールKawaguchizou21@s8.dion.ne.jpへ。